

---

# 以心伝心。～感謝の想い～

龍崎 ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

以心伝心。〜感謝の想い〜

### 【Nコード】

N4697I

### 【作者名】

龍崎 ヒロ

### 【あらすじ】

不良少年ヒロが感じた最高の親心。

自分を見捨てないでいてくれた親へ

感謝の気持ちを含めた感動ストーリー。

ほぼノーフィクションです。

## 第1話（前書き）

親が子を殺し、子が親を殺す現代社会。

今の若い人に

親の大切さ。感謝の気持ちを持ってほしくて書きました。

## 第1話

中2の夏。

盗んだ自転車で

いつものようにゲームセンターに行き、時間を潰す。

いつも友達のもやしと行っていた。

そんなある日。

違う学校のチエックの人と仲良くなった。

あまりいい噂を聞かない学校だ。

それから

学校も行かず、チエックの人と毎日遊んだ。

いつからかモヤシ以外自分の学校の人とはあまり遊ばなくなっていた。

でも楽しくて仕方なかった。

今思えば

始まりはここからだっただのかもしれない。

中2の冬。

自分の周りにはチエツクの人とまた違う学校のグレーの人で仲間が増えていた。

まあモヤシ合わせて8人ぐらいってところ。

いろんな物をたくさん盗んだ。

いろんな人にたくさん迷惑をかけ、傷つけました。

でも楽しくて仕方なかった。

周りなんて見えてなかったし、今が楽しかったらそれでいい。

そう思っていた。

チエツクの人がけわしい顔をしながら

「お前の学校の奴が、俺の女に手出したから呼んでくれ」と言ってきた。

名前を聞くと、一つ年上の空手をしてる人だった。

わくわくした。

すぐに携帯番号を探し、夜の学校に呼び出した。

チエツクの人達、グレーの人達、モヤシもいた。

そしてみんなでボコボコにした。

体中あざだらけだった。何故か笑えた。

倒れている空手の人に

「もう帰っていいぞ」とチェックの人が言った。

涙を流しながら「…はい」と言っていた。

空手の人を連れて校舎を出る。

正門の前に男の人が立っていた。

空手の人の親だった。

## 第1話（後書き）

有り難うございます。

これを読んで何か感じてもらえると嬉しいですよ。

## 第二話

男の人は走ってきた。

静かな夜の学校に足音が響く。

みんなどーしていいかわからず、呆然と立ち尽くしていた。

目の前のチェックの人が鈍い音と共に倒れた。

男の人はひどく怒っていて、興奮していた。

正直殺されると思った。

チェックの人を殴った後  
「帰るぞ」

と空手の人を連れて帰って行った。

翌日。

学校から電話がきた。

「親を連れて今すぐ来い」。

電話は先生からだった。

あの事だとすぐに解った。

僕を産んでくれた僕の人には目に涙をためながら

「なんてゆう事をした今すぐ用意しなさい」と言った。

行きの車の中はピリピリした空気だった。

また夜の学校に向かう。

教室に入ると  
モヤシ、チエツクの人、グレーの人、先生、大人の人がいっぱい  
いた。

みんな下を向いていた。

僕の方は入ってすぐに先生に謝っていた。

何回も。何回も。

その雰囲気になんて耐えられず、僕も下を向いた。

「あんなアザは見たことがない」

「多分訴えられるでしょうね」

先生が大人の人達に言った。

みんな下を向いて帰った。

家に帰ると

「友達を選べ」

「もう関わるな」と僕の人が言ってきた。

腹が立った。

暴言を吐き、物を壊し反抗した。

そして僕は初めて家出をした。

### 第3話

家を出てから三日がたっていた。

寝る場所はなんとかあった。

僕の人からの電話が絶えず鳴っていた。

僕は一回も取らなかった。

でも携帯を触っているとつい電話に出ってしまった。

受話器から怒鳴り声がもれていた。

「…なに?」

「どっかにいるの?」  
「飯はどーしてるの?」  
「お父さんから話があるから帰ってきてなさい」

僕はまた暴言を吐き、電話を切った。

またすぐに電話が鳴った。

「だからなに!？」

内容は、空手の人の親が学校に呼んでるという事だった。

三日ぶりに家に帰った。

僕の方は心配そうな顔をしながら  
「ご飯食べなさい」と言ってきた。

久しぶりに家のご飯を食べた。

野菜がいっぱい入っていた。栄養をとってほしいという想いが痛いほど伝わってきた。

そしてその思いが僕の心を少しえぐった。

その日、また夜の学校にいった。  
僕の人とはまたずっと謝っていた。

何回も。何回も。

なんとか訴えられずに許してもらえた。

学校から帰る時の車の運転が凄く荒かった。

久しぶりに家で風呂に入ろうと  
服を脱いでいると、僕の方は、僕の体を心配そうな顔を見ながら見ていた。

怪我をしていないか心配なんだろう。

珍しいかもしれないけど言葉にしないのが僕の人。

風呂からあがると僕の人が自分の体に何か変な薬を塗っていた。

僕はなんとなく目をそらした。

急いで部屋に戻り、何も見なかった事にした。

僕が家出をやめてから、僕の家は溜まり場になった。

朝でも夜でも関係なく人が出入りするようになった。

## 第4話

夜中部屋でみんなで騒いでいると、僕の人はいつも怒っていた。

「もう帰ってちょうだい」

「平日はみんな朝早いから」

僕は、僕の人のごく細い手首を強く握り、部屋の外まで連れて行き「勝手に部屋に入るな」

「黙れ」

そう言っつていつも部屋に鍵をした。

家族みんなが起きる時間になれば僕たちは家を出る。

家の前には改造されたバイクが並んでいる。

静かな朝に爆音だけが響き渡る。

そして夜中までいろんな場所で時間を潰し、夜中になればまた僕の家が集まった。

今が楽しかったらそれでよかった。

ただ楽しくて仕方なかった。

中3の夏。

まだ僕の家は溜まり場だった。

夜中僕の部屋で酒を飲んで騒いでいた。  
平日の夜中だ。

また僕の方は怒って部屋に入ってきた。

酒も入っていたせいか、僕は今まで以上にきつく言っ僕の人を突き飛ばした。

簡単に飛んだ。。。

「殺すぞお前」。

本当に殺意が芽生えた。

倒れている僕の方の悲しい目を見ると、よけいに腹が立つ。

「こんな家出てったるわ」

廊下の物を蹴り飛ばし、また家出をした。

## 第5話

家を出てから5日ほどたっていた。

また僕の人からの電話が鳴り止まなかった。

「どこにいるの？迷惑になるから帰りなさい」

「ご飯はどうしてるの？栄養ちゃんにとってるの？」

「今日はあんたの好きなお肉焼いたよ？」

「お願いだから帰ってきて」

僕は「はあ？知るか」

「ほっとけ、お前には関係ない」と電話を切った。

本当はちょっと帰りたかった僕は次の日朝早くに家に帰った。

僕の人が玄関に早歩きで来た。

「どこいったの？」

心配そうな顔をして聞いてきた。

僕は無視をしてリビングに向かった。

家族が家を出た後の残った朝ご飯を食べようとする。「ちょっと待ちなさい、ちゃんと作ってあげるから部屋行ってなさい」

僕の人が真剣な顔で言った。

「はぁ？早くしろよ」

部屋に戻り窓を開けてタバコを吸った。

いい天気だ。

静かな朝に鳥の鳴き声だけがする。

「ご飯できたよ」

僕の人が部屋に持ってきた。

僕は「置いたらすぐ出て行け」と言った。

僕の方は黙っておぼんを机に置き、部屋をそっと出て行った。

部屋中いい匂いがした。

いっぱい野菜とお肉だった。

食べ終わるとまたすぐに家を出ようと靴を履いていると。

「どこ行くの？」と僕の方が玄関に早歩きできた。

なにも言わず家を出てバイクにまたがる。

小窓から僕の方が悲しい目をしてこっちを見ていた。

またゲーセンで時間を潰し、夜家に帰った。

僕の人がリビングに一人で座っていた。  
僕には気づいていなかった。

また体に薬を塗っているのを見た。

よく見ると、体全身に赤いはんてんがあり皮膚がボロボロになっていた。

首から足の先まで全身。

ヘルペスだと知った。

僕がリビングに行こうとすると足音で気づき、慌ててタオルで隠した。

「どうしたの？」と言いたかったが、言えなかった。

部屋に戻り急ぐようにタバコに火をつけた。

なんで僕なんかのためにそこまでしてくれるの？

そう思うと涙が止まらなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4697i/>

---

以心伝心。～感謝の想い～

2010年10月28日08時29分発行